

## サパティスタ自治区における実践

— 自治学校を事例として —

柴田修子

サパティスタ民族解放軍（EZLN）の武装蜂起から20年経った。その間、武装闘争路線の放棄、先住民自治を求めた政府との交渉、PRDなど既存政党との歩み寄りと決裂、自治区再編とカラコル・善き統治評議会の創設、選挙による政党政治を批判する国内各地の人々との協働など、必要に応じて戦略を変えながら、運動を存続させてきた。インターネットを駆使し、「従いながら統治する」「たくさんの異質性からなる世界」など民主主義の根幹を問い直すメッセージを発信してきた彼らは「インターネットによる社会運動の先駆け」「言葉を武器にしたゲリラ」などと称される。しかしこの運動の革新性は、レトリックにあるのではない。状況に応じて運動の方向を修正しながら自治の構築を目指す「実践」にこそある。とりわけ学校教育は、次世代の育成という意味でも重要な課題の一つである。そこで本稿では、サパティスタ自治区における教育の現状を明らかにする。

### はじめに

1994年1月1日、メキシコ南東部のチアパス州において目出し帽をかぶった人々が突然観光都市サン・クリストバル・デ・ラス・カサスおよびラカンドン密林の入り口にある3都市を占拠した。サパティスタ民族解放軍（Ejército Zapatista de Liberación Nacional EZLN）と名乗る彼らは「ラカンドン密林宣言」を発表し、チアパス州における社会的排除の現実を世界に訴えた。「500年にわたる戦い」から生まれた先住民の運動と自らを規定しながらも、先住民の貧困がチアパス州という一地域の限定的な問題ではなく、メキシコにおける民主主義の欠如の帰結であると主張した。政府は当初武力で制圧しようとしたが、事実上の一党独裁の弊害に不満を募らせていたメキシコ人はサパティスタを支持し、各地で政府に対する抗議デモが行われた。これを受けて政府は武力制圧を断念し、サパティスタも武器を置いて「言葉による交渉」路線を貫くことになる。

その後政府との関係性によって方針を変えながら、インターネットを通じて全世界に

メッセージを発信してきた。「従いながら統治する」や「たくさんの異質性からなる世界」など民主主義の根幹を問い直すメッセージ性に共感した人々の声が、当初軍事的な解決を目指した政府に対する抑止力となり、現在に至るまで武力衝突は起きていない。サスキア・サッセンはサパティスタをインターネットによって従来にはない新しい戦略を作り出した運動として評価し、彼らが①ローカルな叛乱、②国境を越えた市民グループ運動の二つによって構成されていると述べる。②はインターネットや既存のメディアを通じてメキシコ政府に働きかけ、和平、人権、社会正義のための闘いをサポートしてきたという(Sassen 2007: 203-204)。サパティスタの存続に市民社会が重要な役割を果たしたということについて筆者も異存はない。しかしながら、この運動の革新性は、メッセージのレトリックやインターネットの利用といった方法論にあるのではない。状況に応じて運動の方向性を修正しながら、自治の構築を目指してきた「実践」にこそある。

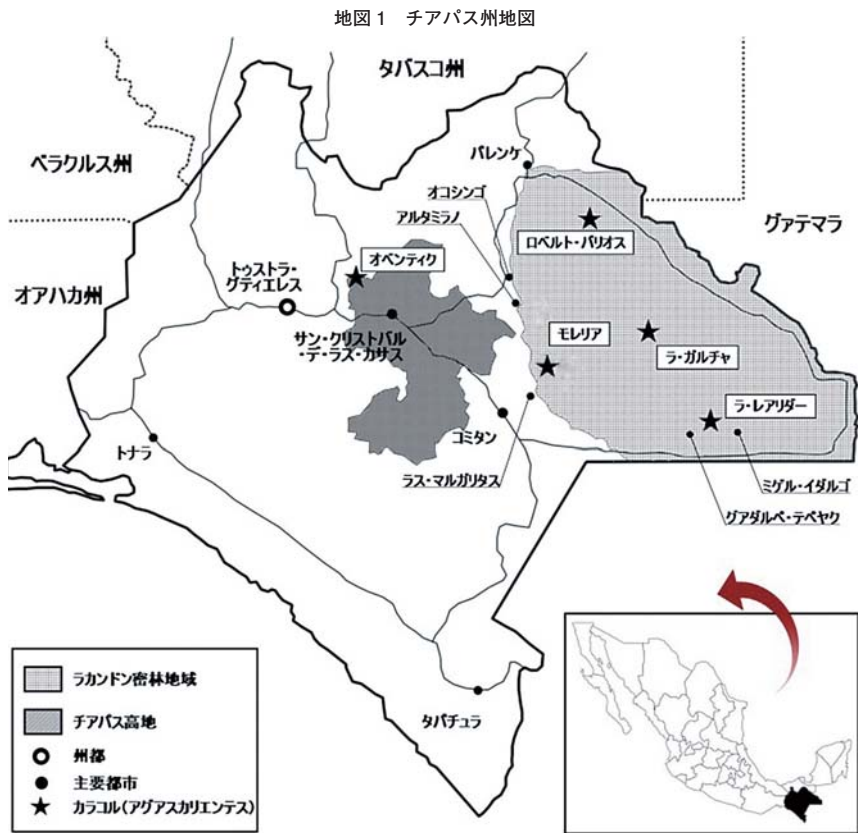
本稿ではサパティスタの自治構築の取り組みの一つとして教育の変遷を取り上げ、自治区内でどのような取り組みがなされているのかを考察したい。まず第1章では自治区創設と再編の経緯をたどる。続く第2章ではチアパス州における教育を概観し、第3章で自治区における教育を見ていく。なお、自治区内の学校で目指されているのは、初等・中等教育である。そのうち中学校は現在カラコルⅡに1校、Ⅳに7校あるとされるが、現在現在運営されている自治学校のほとんどは初等教育である。そこで本稿では、初等教育を扱うものとする。

サパティスタの研究については、研究動向をまとめた本が出版されるほど多くの著作が存在しているが、自治区における教育の現状についての研究は、さほど多くない。2003年までは自治区に入って調査することが容易ではなかったことと、自治教育自体が比較的新しい試みであることがその理由と考えられる。蜂起直後の状況については、レイバやピネダなど、蜂起以前からフィールド調査を実施していた研究者たちの報告から知ることができる(Leyva1995, Pineda 1995)。また、ジャーナリストとして自治区に長期間滞在したムニョスの報告は、現地の貴重な情報となっている(Muñoz 2004)。

一方自治区の再編以後現地に入りやすくなり、さまざまな研究者がフィールド調査を行っている。グティエレスはチアパス高地(カラコルⅡ)における中等教育を調査し、公教育と自治教育の比較を行った(Gutiérrez 2011)。彼は、権威主義的な役割分担が内在化している公教育に比べ、自治教育がより水平的な関係性を構築することに成功していると結論づけている(Gutiérrez 2011: 252-262)。ヌニェスは北部地域(カラコルⅤ)の自治教育がどのように行われているかを明らかにし、カリキュラムの自由度を評価して

いる (Nuñez 2011: 285)。また、メキシコ大学院とソルボンヌ大学で博士号を取得したパロネの研究は、5年間にわたるオコシゴ渓谷部 (カラコルⅣ) での調査に基づき、同地域の自治教育がどのように広がったかを明らかにした労作である (Baronnet 2012)。

それぞれの研究は、各地域に特化する傾向にあり、自治区の構築との関係が見えにくい。またサパティスタの文書は定期的に発表されるわけではないので、情報としては断片的である。そこで本稿では、これまでの研究の蓄積とサパティスタの文書に筆者のフィールド調査を加えて、自治教育がどのように構築されたのかを見ていくことにしたい。



Comisión Nacional para el Desarrollo de los Pueblos Indígenas Centro de Documentación sobre Zapatismo より作成

## 1 自治区の構築

サパティスタを支持する村々が最初に自治区を宣言したのは、1994年12月である。村がいくつか集まって自治区を形成し、それぞれが「アグアスカリエンテス」と呼ばれる外部との交渉を担う拠点の村に所属した。1994年の時点で31の自治区が形成された(表1参照)。村の自治区への参加はサパティスタ派に連なるという意思表示のようなものであり、最高意思決定機関は、サパティスタ軍の司令部である先住民革命地下委員会=サパティスタ民族解放軍総司令部(CCR-CG・EZLN)に置かれていた。自治区とはいえ、それぞれの自治区における意思決定機関は存在しておらず、重要な決定を先住民革命地下委員会が行い、それを受け入れるかを村単位で決定していた。

表1 1994年12月時点での自治区

アグアスカリエンテス	地域	自治区
ラ・レアリダ	密林地域	リベルター・デ・プエブロス・マヤス, サンベドロ・デ・ミチョアカン, ティエラ・イ・リベルター, マヤ, ホセ・マリア・イ・パボン
オベンティク	高地	サンアンドレス・サカムチェン・デ・ロスボブレス, サンファン・デ・ラリベルター サンベドロ・チェナロー, マグダレナ・デ・ラパス, サンファン・カンクク, サンタカタリナ, ウイテイウバン, シモホベル, サバニジャ, ポチル, シナカンタン
ラ・ガルチャ	密林地域	フランシスコ・ゴメス, フロレス・マゴン, サンマヌエル, サンサルバドル
モレリア	渓谷部	17デ・ノビエンブレ, ミゲル・イダルゴ, 1デ・エネロ エルネスト・チェ・ゲバラ, ルシオ・カバニャス
ロベルト・バリオス	北部	ビセンテ・ゲレロ, トラパホ, フランシスコ・ビジャ, ラパスベニト・フアレス, インデペンデンシア

Centro de Documentación sobre Zapatismo より作成  
イタリック太字は表2との重複区。

サパティスタは武装蜂起直後から武器を置き、政府との交渉に入った。1995年2月に政府軍が司令官たちの逮捕を目指して自治区に軍事侵攻したが、司令官の逮捕には至らなかった。メキシコ世論の反対にあって計画を中断せざるを得なくなり、同年3月「チアパスにおける対話、和解および尊厳ある平和のための法」(通称「対話法」)を成立させた。その後の交渉は難航し、現在にいたるまで和解には至っていない。その間両者が歩み寄りを見せたのは1996年と2001年の二回である。まず1996年2月には、対話法を受けて6回にわたって行われた会談の成果として、先住民の権利と文化に関する合意文

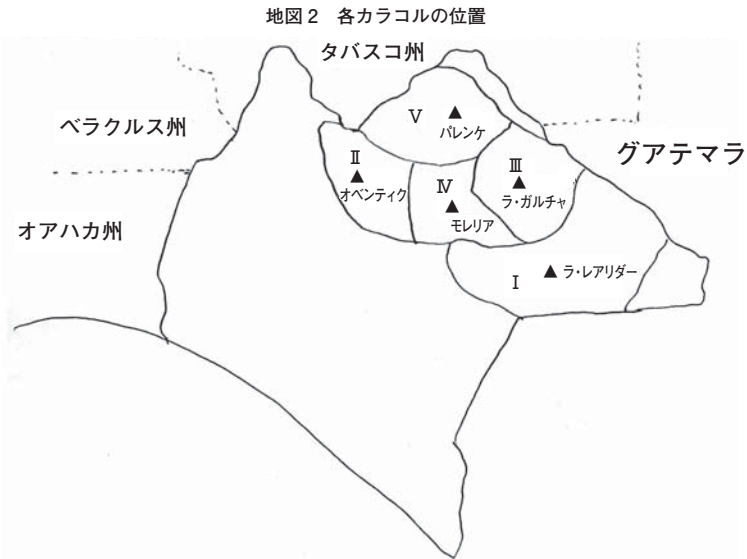
書「サンアンドレス合意」が締結された。しかし政府軍および準軍事組織による嫌がらせに対抗するため、1997年サパティスタが交渉の中断を宣言した。その後2000年の選挙で71年ぶりに事実上の単独政権がやぶれたことで、対話再開の機運が高まる。サンアンドレス合意に基づいた先住民法案の採択を訴えるため、2001年に24名の司令官が蜂起後初めてチアパス州を出て、メキシコ各地を回りながらメキシコシティまで行進を行った。首都では国会演説をするほどの歓迎を受けたにもかかわらず、採択された先住民法はサンアンドレス合意を踏まえない形骸化したものとなっており、サパティスタは政府との交渉が無意味であると考えられるようになった。

2003年7月19、20日に発表された声明で、新しい方針を発表した。その骨子は、政府や政党との接触を一切停止することと、自治区の再編を行うことである。2001年まではメキシコ政府が作る「国家」のなかで共存する可能性を模索していたが、これ以後現行法や枠組みの変更ではなく、「実践としての自治」を目指す方向へ向かうことになる。自治の再編ではまず、アグアスカリエンテスに「善き統治評議会」を設立することになった。その評議会に地域の自治区が所属する。外部からの訪問者の受け入れ窓口としてのアグアスカリエンテスを廃止し、所属する自治区を含めて「カラコル」と称することになった。統治機関としては①村落レベル、②自治区レベル、③「善き統治評議会」という3つのレベルが共存し、連携することとされた。カラコルのもとに再編された自治区は、表2のとおりである。2003年の時点で29の自治区があり、1994年と同じものは22ある。多少の変動はあったが、地域としてはほぼ重なっている。

表2 2003年再編以後の自治区

カラコル	自治区
Iラ・レアリダー	リベルター・デ・ブエブロス・マヤス、サンベドロ・デ・ミチョアカン、ティエラ・イ・リベルター、ヘネラル・エミリアノ・サバタ
IIオベンティク	サン・アンドレス・サカムチェン・デ・ロスボブレス、サンファン・デ・ラリベルター・サンベドロ・ポロー、マグダレナ・デ・ラパス、サンファン・アポストル・カンクク、サンタカタリナ、16デ・フェブレロ
IIIラ・ガルチャ	フランシスコ・ゴメス、フロレス・マゴン、サンマヌエル・フランシスコ・ビジャ
IVモレリア	17デ・ノビエンブレ、ミゲル・イダルゴ、1デ・エネロ、エルネスト・チェ・ゲバラ、ルシオ・カバニャス、オルガ・イサベル、ビセンテ・ゲレロ
Vロベルト・バリオス	ビセンテ・ゲレロ、トラバホ、フランシスコ・ビジャ、ラパス、ベニト・フアレス、サンホセ・エン・レベルディア、ラモンタニャ

Centro de Documentación sobre Zapatismo より作成



Baronnet 2012: 21 より作成

自治区の再編は3つの点で重要な意味を持っていた。一つには政府との交渉を一切断つことである。先に述べたように政府との関係は、状況に応じて変化してきた。しかし2003以後はメキシコ政府とは別の政治空間を作ることが目指されるようになる。政党政治を否定し、「善き統治評議会」では政治家という職業は必要ないとの観点から、輪番制による統治の試みを行っている。第二にサパティスタ「軍」部門による統治を廃止し、村の自己決定に委ねる仕組み作りを行ったことである。サパティスタの構成は、正規軍、民兵、支持基盤からなっている。正規軍は常時武器を携帯し、司令官をトップとする役職がある。民兵は自分の村に住んで必要に応じて武器を取ることになっているが、現在はふつうに村に暮らしている。支持基盤とは後方支援を行う村々を指し、これが自治区を形成している。これまで支持基盤は軍の意思決定機関に従うものとされてきたが、この関係を切り離したのである。2005年に発表された第六ラカンドン宣言では、次のように説明されている。「(これまで) 政治一軍事部門であるEZLNがいわゆる「民間」部門の民主統治に介入してきた。EZLNの政治一軍事部門は軍である以上、民主的な存在ではあり得ない。上部に軍がいて下部に民主主義があるのはよいことではない。その逆でなくてはいけない」(第六ラカンドン宣言Ⅱ部・Enlace Zapatista)。自治の実践を各地域に任せるやり方を模索した結果作られたのが、「善き統治評議会」である。各自治区の代表が集まってカラコルの運営を行う。「善き統治評議会」のメンバーは輪番制とし、各

村がまんべんなくその任務にあたるように定めた。

第3に、村同士の公平性を高める仕組みを作ったことである。サパティスタ自治区における経済活動は、①個人としての経済、②自治区としての経済、の二つに分かれる。①はそれぞれが生活の糧を得る活動であり、同地域では農業がこれにあたる。トウモロコシ、フリホル豆などの基礎作物のほか、コーヒーなどの換金作物を栽培している。土地を共同で利用するか個人の畑を持っているかは、村によって異なる。一方、サパティスタとしての活動には、教育、保健など各種プロモーターや統治評議会のメンバーとしての仕事のほか、集会の際の食事係、清掃などさまざまなものがあるが、これらは互酬性に基づいており金銭のやり取りは介在しない。運動にコミットしても、経済的な面で豊かになるわけではない。②は、学校建設や活動に伴う交通費、病院運営費など、サパティスタ自治のための資金を共同で集める活動である。コーヒー生産組合、共同売店、民芸品販売、家畜の共同飼育などが行われているものの大きな収益を上げるものではなく、②の資金の多くはNGOなどの支援に頼っている。NGOの支援プロジェクトについては残念ながら詳細な資料はないが、2004年に発表された各カラコルの収支報告と、カラコルでの銀行の資本金を比較することで、ある程度推測することができる(表3)。銀行は、カラコルⅠ、Ⅲ、Ⅳで2009年頃から始まった取り組みである。病気など働くことが困難な人に低金利でお金を融通したり、マイクロクレジットの試みを始めている。それぞれの資本金は主に前述した②の活動でためた資金からなっている。たとえばカラコルⅣの資本金は146,000ペソであるが、その内訳は「アルコイリス」共同売店の収益100,000ペソ、村の共同出資金26,000ペソ、2つの温泉地からの収益20,000ペソである(Zapatistas 2013b: 43)表からわかるとおり、各カラコルの収支報告の額に比べ、主に共同運営でためた資金で始められた銀行の資本金の額は非常に小さい。カラコルの運営にとって、メキシコ内外からの支援は非常に大きい。小林によれば、支援の提供者のなかには国際赤十字などの公的国際機関もあるものの、ほとんどはメキシコや欧米諸国のNGOによるものだったという(小林2004: 68)。

表3 善き統治評議会収支報告（2003年8月－2004年8月）および銀行

善き統治評議会	収入（ペソ）	支出（ペソ）	銀行（資本金・ペソ）
I ラ・レアリダー	5,000,000	4,000,000	サパティスタ自治銀行（90,000） サパティスタ女性権限自治銀行（10,000）
II オベンティク	4,500,000	3,500,000	
III ラ・ガルチャ	600,000	300,000	サパティスタ自治銀行（150,000）
IV モレリア	1,050,000	900,000	サパティスタ自治銀行（146,000）
V ロベルト・バリオス	1,600,000	1,000,000	

2004年8月22日付コミュニケおよび Zpatistas 2013a, 2013b より作成

2003年の自治区再編が行われる前、こうしたNGOの支援をめぐって村に不均衡が生じてきたという。マルコス副司令官によると「自治区が国内外の市民社会との関係において抱えている問題は、自治区同士、村レベル、さらに家族レベルにおける不均衡である」（Subcomandante Marcos 2003）。支援についての取り決めは、それが政府によるものであってはならないという点のみであり、対象が自治区であれ、村であれ、基本的にはすべて受け取ってきた。その結果、アグアスカリエンテスなど有名な自治区や村に支援が集中することになった。一方受け取った支援を遠隔の村に分配する仕組みが存在しておらず、村同士の格差を生み出した。そのことが不満材料となり軋轢が生じたため、支援を分配して村同士の平等化をはかる仕組みを作ったのである。従来のような自治区や村レベルでの支援は拒否し、外部からの支援は「善き統治評議会」が一括して管理する。各村の必要性に応じてそれを分配することとした。支援の使い道として各カラコルがもっとも力を入れたのが、保健衛生と教育分野である。とりわけ教育は、政府との関係を断った時点で子どもたちは学校教育から切り離されており、各村にとって焦眉の課題であった。以下ではチアパス州における教育の変遷を概観し、ついでサパティスタ自治区における教育の構築をみていく。

## 2 チアパス州における学校教育

メキシコにおける先住民教育は、国民国家への統合から多文化へと移行する先住民政策に大きく影響されながら変遷してきた。チアパス州においても、基本的には国策と同調するように、スペイン語による一言語教育から二重言語教育へと移っていく。ここでは、チアパス州における政策の変遷をたどり、その問題点を考える。



メキシコ革命の混乱期を経て近代化を推進したメキシコ政府にとって、先住民は国民国家に統合されるべき存在であった。国民統合を推進するための機関として1948年国立先住民庁が設立された。各地に調整センターが設置され、バイリンガル教育プロモーターの養成が行われた。この時点ではスペイン語による教育が主眼とされ、教育プロモーターは先住民村落と政府との橋渡しのような役割を担った。先住民政策に変化が起きたのは1970年以降である。開発経済モデルの破たんを受けて開発路線の見直しをはかったエチェベリア政権は、先住民に関しても従来の統合政策を放棄し、二重言語教育を推進した。1971年公教育省に先住民地域特別学校教育局 (*Dirección General de Educación Extraescolar en el Medio Indígena: DGEEMI*) が設立され、二重言語による先住民居住地域への教育の普及が目指された。1978年に同局は先住民教育局 (*Dirrección General de Educación Indígena: DGEI*) に改編され、二重言語教育に基づく「先住民学校」というカテゴリーが作られた。教師の育成にも重点が置かれ、チアパス州においては1951年にわずか46人だった教育プロモーターが、1980年には571人に増加した (Pineda 1995: 287)。また公教育省の制度が行き届かない小規模な村落の教育を担う機関として、1971年公立教育審議会 (*Consejo Nacional de Fomento Educativo: CONAFE*) も設立された。

チアパス州では、1951年チアパス高地のサン・クリストバルに国立先住民庁の調整センターが設置され、教育プロモーターの養成が行われるようになった。プロモーターは教育のみならず農業、保健など村の発展に関わるあらゆる分野で都市との調整役となり、しだいに先住民村落の特権的な役割を果たすようになっていった (Pineda 1995: 288-290)。1970年代に入り、二重言語教育に力点が置かれるようになるとともに調整センターは増設され、より教育に特化した人材の育成が目指されるようになった。しかし先住民教育局が期待した人材の確保には程遠く、村の有力者のコネや役職の売買で教師になる場合が多かったという (Pineda 1995: 288)。

後にサパティスタ軍が結成されることになるラカンドン密林地帯においては、教育環境はさらに劣悪であった。同地域には、1930年代以降近隣の農園を離れて自主的に密林を開墾した先住民の人々による入植村が建設されるようになっていた。そのため人口が加速的に増加し、1930年の31,668人だった人口が1990年には287,833人となっている (柴田2002: 116)。その一方でインフラの整備は進まず、ほとんどが未舗装道路のままだった。学校教育においては1960年代から公教育省の学校が建設されるようになったものの、初期においてはスペイン語教育が推進された上、その数も非常に少なかった (Baronnet 2012: 59-60)。1990年時点で同地域の識字率は51%であるが、この地域の詳細な調査を

行ったレイバによると、学校教育よりもエヒード組合やカテキスタなどの活動を通じて覚えたケースが多かった (Leyva 1995: 394) <sup>1)</sup>。

当時の教育状況について、トホラバル系先住民で村の生活や学んだことについての記録を残したハビエル・モラレス＝サク・キナル・タハルティクは、次のように記している <sup>2)</sup>。「1960年、学校。プエブラ村に政府から派遣された先生が来た。行儀についてこれまでと違うやり方を教えたが、私たちの心には入ってこなかった。私たちに対して服装や習慣、言語を変えさせようとしている。読み書き、算数、体育、絵画、習字を教えた」(Lenkersdorf 2001: 33) プエブラ村は現在のカラコルⅣ、17デ・ノビエンブレ自治区にあり、密林地帯の典型的な入植村である。彼の両親は、アルタミラノ溪谷の農場出身のトホラバル系先住民で、1953年頃にプエブラ村の開拓に加わった。ハビエルは1955年頃にこの村で生まれた。1960年この地域でほとんど唯一の小学校ができたのがこの村であり、ハビエルはそこで学校教育を受けた。しかし当時はスペイン語による「統合教育」が推進されており、生涯にわたって母語とのあいだにアイデンティティの揺らぎを持ち続けたようである。序文を書いたレンケルドルフによれば、ハビエルが記録をつけ始めたのは1974年サン・クリストバルで行われたカテキスタ養成プログラムに参加した頃からである。当初はスペイン語で記していたが、先住民の言語や文化が見直され始めていた雰囲気の中、しだいにトホラバル語による表記に傾倒していったという。

1970年代には、密林地帯でも二重言語教育が開始された。しかしこの地域で二重言語教師の養成が行われることはなく、教員はチアパス高地から派遣された。彼らは短期間村に滞在して教育に従事するが、村との信頼関係を築くことはなかった。そのため途中退学する生徒が後を絶たず、教員の方も一時的な滞在地で熱心な指導を行うことはまれであった (Baronnet 2012: 59-61)。同地域で教育プロモーターの養成が始まったのは、1980年代後半からである。1988年ラカンドン密林における総合教育・研修プログラム (Programa de Educación Integral y Capacitación para la Selva Lacandona: PEICASEL) が開始した。これは村で教員候補者の若者を選んでサン・クリストバルに派遣し、一定期間教育養成コースを受講させるものである。コースを終えた若者は村に戻り、教育プロモーターとして教育に従事する。これまでと異なり、村の出身者がプロモーターになるため、信頼関係を築きやすいというメリットがあった。このプログラムは、インフラ整備や土地問題などを政府と交渉するために同地域の入植村が集まって結成したエヒード連合が、州政府に働きかけることで実現したプログラムである。1989年から90年にかけて960人の生徒が同プログラムのもと教育を受けた (Baronnet 2012:

78)。

皮肉なことに、チアパス州における公教育の充実が図られるたのは1994年以後である。州政府のプログラムだったラカンドン密林における総合教育・研修プログラム(PEICASEL)に新たに連邦政府の予算がつけられ、先住民共同体教育プロジェクト(Proyecto Educador Comunitario Indígena: PEICI)として教育プロモーター養成の拡充がはかられたのである。その結果このプロジェクトのプロモーターに教わる生徒の数は、一気に7000人に増加した(Baronnet 2012: 78)。また公立教育審議会(CONAFE)も蜂起直後の2月から学校教育プログラムを開始するとした。とりわけチアパス州に力点が置かれ、全国の3分の1にあたる1300人のインストラクター(プロモーターを養成する役)が教育にあたった(Baronnet 2012: 96)。

また、奨学金により就学環境を整える取り組みが連邦政府によって始められた。1997年貧困対策事業として開始された教育・健康・栄養プログラム(通称プログレサ)(Programa de Educación, Salud y Alimentación: PROGRESA)である<sup>3)</sup>。これは「極度の貧困家庭」の将来における貧困レベルを下げることを目的とした政策で、直接現金を支給することに特徴がある。教育面では小学3年から中学3年に在学する児童を対象に、学用品などの現物と奨学金を支給した。ジェンダー平等推進の観点から受給者は母親とされ、2か月に一度現金が手渡しされた。支援をターゲットに学校に在籍するだけの生徒が増えたという批判もある(Gutiérrez 2011: 249)が、就学率の向上に一定の役割を果たしたのはたしかである。表4は、チアパス州の小学校数、先住民小学校数とその卒業者数を示したものである。1994年から確実に増加しているのがわかる。また、同州の非識字率は1990年には州民の31.28%を占めていたが、2010年には17.8%にまで下がっている(INEGI)。

表4 チアパス州における公教育の拡充

	小学校数	先住民小学校数	小学校卒業生数	先住民小学校卒業生数
1994年	5,898校	1,804校	62,864人	7,976人
2011年	8,589校	2,830校	110,531人	32,554人

INEGIより作成

数値の上で拡充がはかれる一方、多文化主義を教育に取り入れるという根本的な課題は解決されなまま残されている。二重言語教育は、公教育に先住民を組み込むための道具として先住民言語が使われており、言語文化として扱われるわけではない。つまり

就学することで、それまで培っていた文化的な背景と切り離された価値観を教えられることになるのである。また、カリキュラムは公教育省の定めた基準に沿っており、先住民性を教育に取り入れてポジティブに評価するものにはなっていない。その結果、知識、経済支援、決定権などあらゆる面で、メスティソ=もたらす側、先住民=それを受け取る側という関係性が教育のなかで再現された (Gutiérrez 2011: 252)。

### 3 サパティスタ自治区における教育

自治学校は、1994年の蜂起当初から想定されていたわけではない。むしろ、政府との交渉が決裂し、衛生から学校にいたるまで「自前の」システムを構築する必要に迫られたことにより、模索しながら作り上げられていったものである。ここでは、自治学校建設にいたる経緯をたどっていくことにしよう。

サパティスタ自治区における教育は1) 1994～1997年までの混乱期、2) 1997～2003年にかけての自治学校の模索、3) 2003年以降の自治学校の建設 という3つの時期に分けることができる。

#### 3.1 政府との交渉期

この段階では公教育に対する不満を、政府との話し合いによって解決しようという姿勢が見られた。蜂起直後に発表した政府への「34項目の要求」では、12番目に教育に関する要求が掲げられている。それによると「先住民の非識字率を一掃するよう要求する。そのためには、われわれの共同体において、無償で教材が提供され、金持ちの利害だけを守る教師ではなく、人々に奉仕する、大学教育を受けた教師が配置された良質の小・中学校が必要である」とある (CCRI-CG del EZLN 1994)。またその際「我々の文化と伝統を考慮し、先住民としての諸権利や尊厳を尊重する」こととした (CCRI-CG del EZLN 1994)。1996年政府とサパティスタのあいだで締結された「サンアンドレス合意」では、教育について「国家は先住民の知恵、伝統、組織形態を尊重し、活用する教育を先住民に保証すべきである」とされた (中南米におけるエスニシティ研究班 1997: 128)。

自治区の村で教育について尋ねると、たいがい「蜂起後、政府の教師はみんないなくなった」という声が返ってくる。筆者自身、政府系の教師の職務怠慢や蜂起直後の逃亡の様子などを何度も耳にした。しかしパロネやグティエレスによると、蜂起後もサパティスタの子弟が政府系の学校に通うことはめずらしくなかったようである (Baronnet 2012: 180, Gutiérrez 2006: 100)。各カラコルが自治の状況について報告したエスクエリタ<sup>4)</sup>の

教科書にも、それぞれの地域で自治学校の試みが始まったのは、1996年から97年頃とある (zapatas 2013a, b)。先述のとおり、蜂起後むしろ学校教育の充実が図られ、先住民の就学機会も増えていった。そうしたなか、当初はサパティスタも公教育を受ける場合があったのである。

### 3.2 自治学校の模索

サパティスタが自らの学校建設を模索するようになったのは、1997年以降である。これは公教育への不満というよりはむしろ、政府軍の示威行動や準軍事組織による攻撃から村を防衛するための自衛手段として始まったものである。相次ぐ嫌がらせに対抗するため、1997年1月11日サパティスタは政府との交渉を中断して「抵抗生活」に入ることを宣言した<sup>5)</sup>。このとき以降政府からの支援を一切受け取らない方針を明確化し、学校教育についても独自のあり方を模索するようになった。しかしこの時期には統一方針があったわけではなく、自治区あるいは村単位でNGOの支援を受けて独自の学校を運営した。

ラカンドン密林地域においては、サン・クリストバルに本部を置くNGOエンラセ・シビルが、1997年「セミジータス・デル・ソル (Semillitas del Sol)」という教育支援プロジェクトを開始した<sup>6)</sup>。メキシコ各地の教員や学生がボランティアとして村に滞在し、村の生活に根ざした教育プロモーターの養成を行った。プロジェクトは北部や渓谷部でも行われ、2001年までに17の自治区で実施されている (Enlace Civil)。渓谷部のモレリアでは1997年から1デ・エネロ自治区で「先住民共同体教育プログラム」が始まった。これは農村地域の先住民支援を目的に1982年設立されたNGOエンラセ・コムニカシオン・イ・カパシタシオンが行ったものであり、セミジータス・デル・ソル同様村の教育プロモーターを養成した。1998-99年で25村、1200人の子どもたちが学んだという (Gutiérrez 2006: 102)。

一方高地では主に2つのNGOが活動した。一つにはオベンティクで学校建設を担ったスクール・フォー・チアパス (School for Chiapas) であり、もう一つはポロ周辺の避難民コロニーで活動したタ・スポル・ベ (Ta Spol Be) である。スクール・フォー・チアパスは米国サンディエゴに本部を置くNGO「メキシコにおける尊厳・民主主義・平和を求めるサンディエゴの人びと (San Diegans for Dignity, Democracy and Peace in Mexico)」が1996年から始めたプロジェクトである。中心的に活動を行っているピーター・ブラウンによると、1994年の蜂起時から上記の名前で支援を模索してきたが、1996年「人類のため新自由主義に反対する大陸間会議」<sup>7)</sup>に参加して、自治区に学校を建設す

る計画を思いついたという(2009年3月筆者聴取)<sup>8)</sup>。サパティスタ自治区で活動を行うには、村の許可を得る必要がある。オベンティクでプロジェクトを提出したところ約6か月後に許可が出て、サパティスタ反乱自治教育システム(Sistema Educativa Rebelde Autónomo Zapatista)を開始した。高地に小学校(Escuela Primaria Rebelde Zapatista EPRAZ)と中学校(Escuela Secundaria Rebelde Zapatista ESRAZ)を建設し、地元の先住民が教師として先住民言語による教育を行うことが目指された。資金面では、1998年までに3万ドルが集まったという。また2000年には、オベンティクに初のサパティスタによる中学・高等教育機関である「1月1日サパティスタ反乱自治中学校」が開校し、180人の生徒が学ぶことになった(Gutiérrez 2006: 102)。

二つ目は、ポロ周辺の避難民を対象に教育を行った、メキシコのメトロポリタン自治大学の学生たちである<sup>9)</sup>。アクテアル虐殺事件後の1998年1月、同地域を訪問した彼らが村に援助を申し出たところ、もっとも必要なのは保健衛生と教育であるとの答えが返ってきたという<sup>10)</sup>(2001年8月筆者聴取)。自治区になって以後学校が閉鎖されたままで、まともな授業が行われていなかったためである。1998年3月アクテアルを訪問したメトロポリタン自治大学の学生が中心となってTa Spol Be(ツォツィル語で「道を開く」の意)というNGOを立ち上げた。メキシコシティでアドバイザー(都市の学生)のための研修を行い、これを受けたアドバイザーがポロで教育プロモーター(村の先住民)の育成を始めたのである。プロジェクト開始にあたって村からの唯一の要望は、政府の教師のような独善的なやり方はしないでほしいとのことだった。アドバイザーは最低6か月村に滞在し、希望があれば延長可能である。プロモーターの養成は10か月かけて行い、子どもたちへの授業はツォツィル語で行う。プロモーター候補者の選出は基本的に村が行うが、自ら希望して来る場合もあった。月・水・金にプロモーターが子どもたちに授業を行い、火・木はアドバイザーがプロモーター対象に授業を行っていた。2001年当時、ポロおよび避難キャンプ8(1から9までである)で150人の生徒が授業を受けていた。

この時期の課題は、地域ごとの不均衡にあった。これらの取り組みは、サパティスタに好意的な市民社会の人びとの支援によって成立していたからである。資金面やアクセスの制限などから、できるところから手さぐりで行われていったものである。一方、自治区には徒歩でしかアクセスできない遠隔の村も多く存在しており、自治区間、村落間の教育格差は拡大する一方であった。外部からの援助がアグアスカリエンテスなど一部の村に集中し、遠隔の村の不満を生み出した(Zapatistas2013a: 8)。とりわけ教育は次世代を育てるという意味で、最重要課題の一つであり、遠隔地の村のなかには、教育に対

する不満からサパティスタを離反した村もでてきた。たとえばグアテマラとの国境付近に位置するサンタマルタ村は、当初強固なサパティスタ支持基盤だったが、1997年村の総意でサパティスタをやめて政府の支援を受け入れるようになった。その一番大きな理由は、子供たちの通える学校がなくなってしまったことだった（2003年9月7日筆者聴取）。

### 3.3 自治学校の建設

こうした不満を受けて2003年に行われたのが、自治区の再編である。これまでバラバラだった支援をカラコルごとに一本化し、善き統治評議会を通じて平等に分配することとした。先述のように、なかでももっとも力が注がれたのが、保健衛生と学校教育の平準化である。教育プログラムについては、各村に小学校を建設することが目指された。高地（カラコル II）ではサパティスタ反乱自治教育システムが続けられ、それ以外の地域では、セミジータス・デル・ソルのプログラムの拡充がはかられた。

現地調査を行ったバロネによれば、2008年時点での学校数は次のようになっている（表5）。2014年現在、自治区の学校数を発表しているのはカラコル IIのみであるが、それによると II では小学校数 157、教員数 496、生徒数 4,886 人となっており、2008年からも増加傾向にあることがわかる（Zapatistas 2013a: 26）。

表5 各カラコルの自治学校、教員、生徒数

カラコル	I	II	III	IV	V	合計
学校数	50	60	120	120	160	510
教員数	150	300	200	300	350	1,300
生徒数	1,800	3,300	4,000	3,000	4,000	16,100

Barronnet (2012) 22 から作成

自治区独自の学校建設は先述したとおり、さまざまな NGO の経済的・人的支援のもと行われたものであったが、全体の方針は自治区のなかで話し合いながら統一されていった。カラコル I で最初の善き統治評議会メンバーを務めたドレットによると、同地域での自治教育は1997年に開始した（Zapatistas 2013b: 4）。「1994年以降公教育省の学校教師との間に問題が起きていて、その頃から我々の教育をどうするかを話し合うようになった。問題というのは、教師がスパイのようなことをしたり、学用品を運ぶのに政府軍を使うようになったことだ。そのことがわかって、教師を我々の自治区に入らせないようにした。我々自身で教育を始めなければならないことに気づき、・・・政府と同じ教育を

するのか変えるのかを考えて、やり方を変えていくことにした」という (Zapatistas 2013b: 4)。そこで先住民革命地下委員会 (CCRI) とサパティスタ軍司令部全員がラ・レアリダーに集まって代表者会議を行い、従来の政府による教育システムの改善すべき点を話し合っただけでなく、それを各村で検討した後、教育プランが出来上がった。そこにはサンアンドレス交渉のなかで重ねられてきた先住民自治の議論も盛り込まれていた (Zapatistas 2013b: 16)。

現在自治学校 (初等教育) で教えられているのは①算数, ②歴史, ③生活と環境, ④言語 (スペイン語), ⑤総合の5分野である。公教育との大きな違いは、まず第一にスペイン語を第二言語としての「言語」という扱いにすることで、母語である先住民言語の優越性を示したことである。あらゆる教科の授業は、先住民言語によって行われる。第二に、それぞれの生活文化に根差した教育を推進したことである。たとえば、従来の理科は、「生活と環境」に改め、机上の学問ではなく、薬草や伝統的な農法の知識を取り入れることを目指した。歴史では村の闘争も教えられることになった。「総合」は、各分野に収まらないが学ぶ必要があるとされるものを勉強する時間である。具体的にはサパティスタの13項目要求 (家, 土地, 仕事, 健康, 食料, 教育, 独立性, 民主主義, 自由, 正義, 文化, 情報, 平和) などである。それぞれの教科は3つのレベルに分かれており、レベル1ができたと判断されれば、レベル2を学ぶことになる。いわゆる学年というカテゴリーはなく、到達度別に次に進むことになっている。到達度は教師が生徒の様子から判断することになっており、テストは行われぬ。「大切なのは、子どもたちが読み書き計算をはじめ、村にとって必要な仕事をこなせるようにたくさんのことを学ぶこと」 (Zapatistas 2013b: 5) であるという考えから、成績表や終了証書も存在しない。

教師は教育プロモーターとよばれ、各村で候補者が選出される。プロモーター候補者は一定期間研修を受けた後、村に戻って子どもたちに上記のテーマについて授業を行う。初期にはプロモーターの研修は、セミジータス・デル・ソル、スクール・フォー・チアパスなどのNGOが行っていた。研修は6か月間で、月20日間研修を行い、残りの10日間を自分の村で過ごすというサイクルを6回繰り返す。初期にはレベルが安定せず、「特訓」のためさらに滞在を延ばす必要があるプロモーターもいたという。世代を経るにつれ、プロモーター経験者が次世代を育成する仕組みが整い、現在ではフォルマドール (研修係) グループが各カラコルにある。フォルマドールもその地域出身者であり、ラ・レアリダーなど主村に滞在して、プロモーターの養成や授業のためのプログラム作りなどを行っている。



では、プロモーターの生活はどのようになっているのか。ここでミゲル・イダルゴ村（リベルター・デ・プエブロス・マヤス自治区，カラコル I）のプロモーターの話を紹介しよう。

フェルミン（40歳，ミゲル・イダルゴ村の教育プロモーター）

サパティスタの学校は1, 2, 3レベルに分かれているが，学年はありません。テストはなく，教師が質問をしていけそうだったら次の段階に進みます。授業は先住民言語で行われ，スペイン語は「言語」として扱います。そのほか算数，歴史，生活と環境が教科としてあります。一クラス最大20人で午前8～11時，午後12～14時。週3回（月火水）授業です。

プロモーターの仕事は無給のかわりに，自分が本来行わなければいけない農作業を一部村の人が肩代わりしてくれます。たとえば，10日間子供のために時間を使ったら，自分の本来の仕事は5日分他の人がやってくれる。それで5日分の労働をサパティスタに貢献したことになるわけです。プロモーターは定期的にカラコルに集まって会合を行っています。

私が子供の頃の先生は，1週間来ていなくなり，2週間後に戻るの繰り返しでした。週末に酔っぱらって月曜日は授業しないこともあり，ツェルタル人だがスペイン語で授業していました。子供たちをぶつこともあった。94年の蜂起で全員出て行きました。

95年に最初のプロモーター養成があり，参加しました。村の任命で2008年からプロモーターをしています。最初のメンバー10人中3人（女性）は若かったので，飽きたり結婚したりでやめてしまい，現在は10人全員男です。（2013年12月筆者聴取）

彼自身は，公教育省の学校教育を受けており，当時についてあまりいい印象を持っていない。子供たちに接するときは，そのときのような強権的なやり方をしないよう心掛けているそうである。1995年のプロモーター養成とは，同年4月セミジータス・デル・ソルがプロジェクト発足前に同地域で開いたセミナーと思われる。積極的に教師を志願したわけではないが，適性を認められて村から派遣されたようである。彼の語りにあるように，教育プロモーターは無給であり「生活のための職業」ではない。これは保険プロモーター，評議会メンバーなどあらゆる役職についてもいえることであり，自治区の

ために働いた分、本来の仕事である農作業がおろそかになる。それをどう補うかは村によって異なるが、ミゲル・イダルゴ村では、別の人が彼の農作業を行うことで生活を支えている。

### 結びにかえて

これまで見てきたように、サパティスタ自治区における教育は、混乱期を経て自治学校の模索が始まり、現在はそれを全域に普及することを目指している。そこには低強度戦争への対抗から政府との交渉を断念し、自分たちのやり方で自治を実践しようとしてきた経緯がある。とりわけ重要視されたのは、カリキュラムの見直しである。「先住民の知恵、伝統、組織形態を尊重し、活用する」というサンアンドレス合意で謳われた理想を、生活文化に根差した教育によって行おうとしている。たとえば古来の農法を学んだり、薬草の知識を学ぶこともある。先住民言語でこそ説明が可能なそうした知識を学ぶことは、自らの文化を尊重する心を育むのに役立つだろう。

また、教育プロモーターの育成は、村同士の交流を円滑にすることに大きく貢献している。定期的に会合を開き、知識を共有してそれを村にフィードバックすることは、「ポスト蜂起」的共通認識の形成につながっているだろう。また自治区で行われる大規模な集会では、教育プロモーターが中心的な役割を果たす。彼らが作る自治区のコリード（独特の節回しで歌われるメキシコの民謡）は、集まる人々を楽しませ、ムードメーカーとしても活躍する。そこには権威主義的な教師像は見られない。

一方で公教育の持つ学問的知識との連結については、現在のところ明確ではない。「勉強を続けたければ、サパティスタの役職についてもらおう。思想のあとは実践あるのみだから」とフォルマドールのソレダーは語る。中等教育を望む子どもはどうするのかという筆者の質問への答えだ。サパティスタでいる限り、政府系の学校に通うことはないだろう。一方自治学校は政府が認可する学校ではないため、サパティスタをやめたとしても、そこから政府認可の中等高等教育に移るのは容易ではない。サパティスタ自治学校の本質は「自治の実践」とはなにかという問いを、試行錯誤しながら模索していくことにほかならない。それが説得力を持って受け入れられている間は進むことができるが、さらなる「学び」を求めたときの道すじは、これからの課題である。

## 注

- 1) カテキスタとは教会の教理を教える役目の平信徒である。司教の訪問が難しい地域でのカトリック教義普及のため、1970年代積極的な養成が行われた。
- 2) 彼は1976年、急性白血病により亡くなった。遺族の希望を受けて、同地域で長年研究を行ってきたレンケルドルフが彼のノートを編集、出版した。
- 3) 2002年から「人間開発可能性プログラム」(通称オポルトゥニダス)に改称されたが、基本的な内容は同じである。
- 4) エスクエリタとは、市民社会の人びとをサパティスタの村に招き、ホームステイをしながら村の生活を知ってもらうという2013年に始まった取り組みである。参加の際には4冊からなる「サパティスタの教科書」が配布される。各カラコルの自治について当事者が語る形式で詳細に報告されており、失敗経験も含め、信頼性の高い資料である。
- 5) 「低強度戦争」とよばれる嫌がらせの実態については、山本(2002) pp148-180 参照。
- 6) サパティスタ運動におけるエンラセ・シビルなどNGOの役割については、別稿で述べる予定である。
- 7) この会議は1996年7月26日から8月3日にかけて5つのアグアスカリエンテス(現カラコル)で開催された。サパティスタが世界に呼びかけた初めての試みであり、42か国から約5,000人が参加した。
- 8) ピーター・ブラウンは、1998年7月25日「観光ビザで政治的な活動を行った」として国外追放処分を受けた。しかし2000年フォックス政権になって状況が変わり、メキシコに戻ることができたという。現在もオベンティクを拠点に活動を続けており、その功績が認められて2013年全米教育協会から人権および市民権賞を授与された。
- 9) 1990年代後半サパティスタ自治区周辺では、準軍事組織による嫌がらせが相次いだ。高地においては蜂起以前からの対立が顕在化し、多くの避難民が出た。詳細は小林(1998)参照。
- 10) 1997年12月22日チアパス高地のアクテアル村が準軍事組織に襲撃され、45名の先住民が虐殺された事件。背景に関する詳細は小林(1998)参照。Ta Spol Beに関する情報は、2001年8月23日筆者が行った、教育アドバイザーのパトリシアへのインタビューに基づいている。

## 参考文献

- Baronnet, Bruno (2011) "Entre el cargo comunitario y el compromiso zapatista. Los promotores de educación autónoma en la zona Selva Tseltal" in Bruno Baronnet, Mariana Mora Bayo y Richard Stahler-Sholk coord. *Luchas "muy otras" Zapatismo en las comunidades indígenas de Chiapas*, pp.195-235, México: Ciesas, UAM, UNACH.
- (2012) *Autonomía y Educación Indígena: las escuelas de la Selva Lacandona de Chiapas, México*, Quito: Ediciones Abya-Yala.
- CCRI-CG del EZLN (1994) "Al pueblo de México: Las demandas del EZLN" <http://>

- enlacezapatista.ezln.org.mx/ (最終アクセス日 2014年5月20日)
- Centro de Documentación sobre Zapatismo <http://www.cedoz.org> (最終アクセス日 2014年5月20日)
- Comisión Nacional para el Desarrollo de los Pueblos Indígenas <http://www.cdi.gob.mx/> 最終アクセス日 2014年5月20日)
- Enlace Civil <http://www.enlacecivil.org.mx/> (最終アクセス日 2014年5月20日)
- Enlace Zapatista <http://enlacezapatista.ezln.org.mx/> (最終アクセス日 2014年5月20日)
- Gutiérrez Narváez, Raúl (2006) "Impactos del zapatismo en la escuela: análisis de la dinámica educativa indígena en Chiapas (1994-2004)" *Liminar*. vol.IV, no.1.pp.92-111.
- (2011) "Dos proyectos de sociedad en Los Altos de Chiapas. Escuelas secundarias oficial y autónoma entre los tsotsiles de San Andrés" in Bruno Baronnet, Mariana Mora Bayo y Richard Stahler-Sholk coord. *Luchas "muy otras" Zapatismo en las comunidades indígenas de Chiapas*, pp.237-266, México: Ciesas, UAM, UNACH.
- Instituto Nacional de Estadística y Geográfica (INEGI) <http://www.inegi.org.mx/> (最終アクセス日 2014年5月20日)
- Lenkersdorf, Carlos (2001) *El Diario de un Tojolabal*, México: Plaza y Valdes.
- Leyva Solano, Xóchitl (1995) "Catequistas, misioneros y tradiciones en Las Cañadas" in Juan Pedro Viqueira and Mario Humberto Ruz ed. *Chiapas: Los Rumbos de Otra Historia*, pp.375-405, México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- Muñoz Ramírez, Gloria (2004) "El Centro de Capacitación Compañero Manuel. Ejemplo de autonomía, resistencia y encuentro" *Rebeldía*. No.21-22, pp.3-17.
- Núñez Patiño, Kathia (2011) "De la casa a la escuela zapatista. Prácticas de aprendizaje en la región chol" in Bruno Baronnet, Mariana Mora Bayo y Richard Stahler-Sholk coord. *Luchas "muy otras" Zapatismo en las comunidades indígenas de Chiapas*, pp.264-294, México: Ciesas, UAM, UNACH.
- Pineda, Luz Olivia (1995) "Maestros bilingües, burocracia y poder político en los altos de Chiapas" in Juan Pedro Viqueira and Mario Humberto Ruz ed. *Chiapas: Los Rumbos de Otra Historia*, pp.279-300, México: Universidad Nacional Autónoma de México.
- Sassen, Saskia (2007) *A Society of Globalization*, New York, London: WW.Norton&Company.
- School for Chiapas <http://www.schoolsforchiapas.org/> (最終アクセス日 2014年5月20日)
- Subcomandante Marcos (2003) 'Chiapas: La Treceava Estela: una historia (quinta parte)' en Enlace Zapatista web site. (2003.7.)
- Zapatistas (2013a) *Gobierno Autónomo I. Cuaderno de texto de primer grado del curso de "La Libertad según ls Zapatistas"*.
- Zapatistas (2013b) *Gobierno Autónomo II. Cuaderno de texto de primer grado del curso de "La Libertad según ls Zapatistas"*.
- 小林致広 (1998) 「チアパスにおける先住民運動 (VI) —チェナロォ地区における先住民組織の

分化と対立』『神戸外大論叢』第49巻1号 pp.51-74.

——— (2004)「サパティスタの先住民自治の実践—10年間の実践と自治行政区の再編—(その1)」『神戸外大論叢』第55巻5号 pp.61-79.

柴田修子 (2002)「ラカンドン密林への入植過程」『外国学研究』第52号 pp.111-138.

中南米におけるエスニシティ班 (1997)『サンアンドレス合意と先住民自治—メヒコにおけるサパティスタ蜂起と先住民の権利—』神戸市外国語大学外国学研究所.

山本純一 (2002)『インターネットを武器にした〈ゲリラ〉反グローバリズムとしてのサパティスタ運動』慶應義塾大学出版会.

